
創真と羽球

晃甫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

創真と羽球

【Nコード】

N 8 7 1 8 P

【作者名】

晃甫

【あらすじ】

ある日、目の前で知り合いを亡くした主人公 柊 創真はそのことがトラウマで今まで続けてきたバドミントンから手を離してしまう。

物語はその4年後、
高校生になった創真とその仲間たちの物語 -

Ep・0 序章（前書き）

初めまして晁甫といいます。

この作品が初めてで誤字・脱字がたくさんあったり駄文だったりと
至らないところがたくさんですが読んで頂けると嬉しいです。

Ep・0 序章

「決めてこいよ、創真」

「まかせろ!!」

- 全国小学生バドミントン大会決勝 -

冬も本番の1月の終わり、

小学6年生だった俺は、

初めての全国タイトルを手に入れた -

「しっかしスゲえよなあ」

全国小学生大会で優勝し意気揚々と帰路につく車の中、

後部座席で俺の隣に座っている同い年の少年 たかいし 高石亮 りょう が話しかける

ちなみに亮はこの大会ベスト8だ

「まさか俺も勝てるとは思ってなかったけどな、まあ実力だろ」

自慢気に亮に言い放つ

亮とは小学校1年からの友達で同じバドミントン少年団に入団したことがきっかけで仲良くなった。

家が近かったこともあり、また両親同士も面識があつたため家族ぐるみの仲なのだ

この日も仕事で試合の応援にこれなかった創真の両親にかわって亮の両親が送迎をしているのである

車はそろそろ高速を抜け住み慣れた住宅街へ入ろうとしている

道路には昨日降った雪が路上に降積もっている

創真の家まであと500mというところの交差点で車は赤信号のため停車する。

この交差点は国道に面しているため創真たちがでてきた細い道よりも目の前に走っている国道のほうが交通量が圧倒的に多いため信号も若干の時間差をつけている。

信号がそろそろ変わろうかという時――

後ろから自動車が追突してきた。

「なんだあ!？」

創真が叫ぶ

どうやら後ろの自動車が凍った路面でスリップしたようだ

その衝突の反動で創真と亮の乗った車が国道へと弾きだされる

そして
-
-
-
-

E p · 0 序章（後書き）

次から4年後です

E p i 満天星学園（前書き）

4年後です

Ep・1 満天星学園

次から4年後です

4年後 - -

「ふあゝあ…」

眠い目を擦りながらベッドからでてカーテンを開ける。

今日は1日天気は良さそうだ。暖かい日差しが全身を包む

創真は15歳になった。今日は高校の入学式の日である。

2階の自分の部屋を出て1階のリビングへと向かうとすでに母が朝食を用意していた。

「おはよう母さん」

「おはよう創真」

創真は朝食のパンをかじりながらテーブルに着きテレビをつけた。

時間は朝6時、めざしテレビがやっていた。

そしてちょうどスポーツ報道の時間だったようで

『先日行われたアジア大会でバドミントン男子初の快挙がー』

俺は自然とその報道に意識を向けていた。

それを見ていた母が言う

「創真、あなたやっぱり…」

「違うんだ、ちょっと気にはなったけどそんなんじゃない」

母の寂しそうな顔を見るのが辛くなって俺は朝食を早めに食べ終わ
り部屋に戻って制服に着替え家を出た。

時刻はまだ7:00

家から高校生までは自転車で20分ほどなので8時までに行かなく
てはならない高校へ行くにはまだ時間がある。

「行つとくか」

そう言うところ創真は高校とは反対方向へと自転車を漕ぎ出した
時間にしてわずか3分ほど。

そこにはある家が建っている

創真は家のインターホンを押した
するとすぐに反応があった

『はい高石です』

「おばさん、創真だよ」

『あら創真くん、あがつて』

玄関に入ると朝食なのか味噌汁のいい匂いがする

玄関をこえリビングをこえ一室の前で立ち止まり襖を開く。

その部屋は全体的に洋風な家のなかでただ1つ和室だ
6畳ほどの広さの部屋の片隅に、仏壇が置かれている

創真は仏壇の前まで行って座り、目を閉じて手を合わせる。

「亮……」

4年前のあの事故 -

国道へと弾きだされた創真たちを乗せた自動車は亮が座っていた後

部座席左側に大型トラックが衝突、

亮の両親と創真はなんとか一命はとりとめたものの、亮は搬送された病院で亡くなってしまった -

「いつもありがとうね創真くん」

「いえ、俺は亮に助けられたんだから」

そう言って立ち上がると和室をあとにした

高石家をでると、時刻は7：20

「そろそろ行くか」

そう言って自転車を高校へと進めていく

でかい

ただただでかい

これが創真の高校を見た第一印象だ

今日から創真の通う高校

どうだんつつじがくえん
- 満天星学園

神奈川に建つこの学園は東京ドーム5つ分はあるであろう広大な敷地に校舎が6つ、寮が2つ、グラウンドが3つととにかくでかい

高校でこのでかさは以上だ

校門の前には入学式の準備をしている教員や上級生の姿が見える。

現在7:50

入学式は9時からなので時間はまだ早いのだが新入生はクラスに集まらなくてはならないのでこの時間でも真新しい制服を来た新入生がちらほらと見受けられる

ちなみに満天星学園の制服は男子はカッターシャツにグレーのサマ―セーター、紺色のズボンにローファーでワインレッドのネクタイ、女子はチェックのスカートで紺色のソックス、ネクタイの代わりにリボンを着けている。

とりあえず教室いかないとダメだよな
そう思った俺は校門を抜けクラス分けが掲示されている1年生校舎の前へと向かう。

掲示板の前には30人ほどの新入生が集まっていたがやはり掲示されている紙もでかい -

満天星学園の新入生は1クラス40人でそれが12クラス、480人である。それが3学年なので生徒総数は1440人、それに教員を加えると1500人を超える。

なので480人を掲示している掲示板もでかいのだ

「え」と俺の名前は…あつた6組か」

名前を見つけた創真は1年生校舎へと入っていく

1年生校舎は4階建てで4階が1～6組、3階が7～12組、2階は音楽室やパソコン室で1階が食堂になっている。

4階まで上がって6組の教室の前までいきドアを開けた

入ってみるとすでに数人の生徒がいた。

創真が知っている人は誰もいない

この満天星学園は

他県から多くの生徒がスポーツ推薦などで入学してくるため北は北海道、南は沖縄まで幅広い生徒が集まるのだ

故に、創真の知り合いは1人もいない

…はずだったのだが…

「あー！！もしかして柊くん！？」

なぜか俺の名前を知っていて話しかけてくる茶髪の女子。肩ほどまで垂らした髪の毛はきれいだ。

創真の知っている人はいない

が、

創真を知っている人はいた

なんとなく嫌な予感がする創真。

「えーと…俺は君のこと知らないんだけど」

「そりゃそーだよ、会ったの今日が初めてだもん」

だよな…

心の中で呟く

「なんで俺のこと知ってるんだ？」

「だって私バドミントンやってたから」

ああ…なるほど

「全小優勝した柊くんでしょ？中学のときは名前聞かなかったけどこの学校でバドミントンやるの？」

「いや、やらないよ」

そう言いながらその場を離れて自分の席につく

…その後をついてくるさっきの女子

「まだ何か？」

「自己紹介してないなと思って。私^{ふくさわ}福沢 星^{ほしな}南、よろしくね」

「ああ、」

この嫌な予感は何なんだろうなーと思いながら福沢さんと自己紹介をする

「柊 創真だ、よろしく」

E p · i 満天星学園（後書き）

入学式が始まらない…

Ep.2 急展開（前書き）

入学式終わってます…（笑）

Ep.2 急展開

一言で言うと

入学式はとてつもなくめんどくさかった。

バスケットコートが5面はあるだろう体育館に集められ、校長の大しておもしろくもない話を20分以上も聞かされ、この学園の歴史をDVDで大画面で見せられ、極めつけに生徒会長と新入生代表の話が合計30分、合計で2時間を超える入学式は創真の精神をへし折るには十分だった。

「まじであれはないだろ…」

入学式を終えてクラスに戻ってきた創真は机に項垂れている。

時刻は11:15

創真の席は縦6列、横7列ある机の右から2列目の後ろから2番目、なかなかいい位置にっている

が

「あ 柊くん前なんだ」

後ろがこいつだった

朝から感じているが

なんとなくこの娘が俺は苦手だ。

理由はよくわからんが。

顔立ちはいい方だ

前髪の左側は耳に掛けてピンで留めている。

なんかスポーツ少女のような雰囲気なのにまったくガサツじゃない
みたいな感じ？

「ところでさ、柊くんは部活どうするの？」

福沢が聞いてくる

「ん？どこにも入るつもりはないけど」

「え？でもそれって…」

ガラッ

前のドアを開いて先生が入ってきた

「よしみんな入学式お疲れさん、俺が担任の九十九つくも健三けんぞうだ。これから1年よろしくな」

…なんか軽い先生だな。

まあ高校なんてこんなもんなのか とも思っている

「じゃあみんな自己紹介してくれー、名前と所属する部活くらいでいいから。」

……は？

「所属する部活……？」

「あー…やっぱ柊くん知らなかったんだね」

後ろから福沢が創真へ話しかける

「この学園は絶対にか部活に入らないといけないんだよ」

「聞いてないんだけど！！初耳なんだけど！！」

「おーいうるせーぞ柊ー、お前から自己紹介するかー？」

「いやいいです！」

福沢が小声で続ける

「この学園スポーツにすごい力入れてるでしょ？それは全員やるスポーツテストとかまでに及ぶらしくて体力つけるとか技術を身につけるとかで全員部活に参加しないといけないんだよ。」

パンフレット見なかったの？

という福沢の声も今の創真には届かない。

『まじかよ…そっぴやなんかそんなこと書いてあったかもなあ…くそっ、こうなったら文化系の部活に…』

「おい柊ー」

ビクウツー！！

と創真の肩が上下する

「お前の番だぞー」

こうなったら…

「…柊創真です、部活は…茶道部です」

茶道部ならなんからくそくだしいいだろ
…と思っていたのだが、

「んー？お前文化系はダメだろ。柊はスポーツテストで入ったんだから体育系やないと。」

ピシッ

と創真の頭のどこかで響いた

「あー…、ならドッチボール部に…」

「うちにドッチボール部はねえ」

まー今日中に決めとけよー

と担任九十九に言われ机で再び項垂れ創真。

今日は入学式のための日程なのでHRが終われば帰るもよし、部活見学に行くもよし、新入生の自由なのだ。

なので創真はすぐに家に帰るつもりだったのだ

…が

なぜか創真は福沢星南と先ほど入学式を行った体育館の前にいる。

福沢に部活見学に行こうと無理やり連れてこられたわけで、創真自身全く気乗りではない。

体育館に入ると入学式の椅子などは片付けられ代わりにバドミントンネットが張られている。

どうやらこの体育館はバドミントン部の使用している体育館らしい。

というのもこの学園にはバドミントン、バスケット、バレーボール

部はそれぞれ専用の体育館が与えられているからだ。

「しっかし広い…」

この体育館はバドミントンコートが20面張つてある。

通常の高校は6〜8面ほどだろう

「満天星学園のバドミントン部はすごく強いんだよ」

福沢が嬉しそうに話す

…知ってるよ

創真は口には出さず思う

満天星学園は名門だ。神奈川県では不動の地位を築き上げ、全国大会でもベスト8クラスの常連、当然練習もキツく部員の数も多い。

周りを見ると自分たちのほかにも新入生が20人ぐらい体育館に見学に来ていた。

「福沢はバド部に入るのか？」

「うん、そのつもりだよ。」

この名門に入るつもりということは福沢もなかなかの実力者ということなのだろうか。中学時代に活躍した選手は知らないからなあ、

「君たちも入部希望か？」

話しかけてきたのは身長180くらいの男子。

髪の毛の後ろは首くらいまで伸びていて前髪は真ん中で分けている。

一言で言うとな美形だ

「あ いや俺は…」

「そうです!!」

創真が何か言う前に福沢が話を進めていってしまつ。

「そうか、ならとりあえず着替えてくれるかい？着替えはこっちで準備してあるから」

「着替え？」

二人の声が重なる。

「うちが名門なのは知ってるだろう？だから実力がある程度ないと入部は認められないんだよ。」

ええー！？

という福沢星南の声と

さー帰るか

という柊創真の声が体育館にこだました。

Ep.2 急展開（後書き）

次回入部テストです

Ep.3 入部テスト（前書き）

テストです！

Ep.3 入部テスト

面倒なことになった…

創真は率直にそう思う。

結局福沢と一緒に入部テストを受けるはめになってしまった創真は貸し出されたユニフォームに着替え、
こうして並びたくないのに他の新入生と同じように2、3年生の前に並んでいる。

「さて、これから入部テストを始めようと思う。俺は部長の吉村^{たける}健だ、よろしく」

あの美形が部長だったのか

創真が考えているとその美形部長が続けて話しだす

「入部テストは簡単だ、今から1人1人2年生と試合をしてもらう。もちろん男子は男子と、女子は女子とでだ。1ゲームだけだから死ぬ気でやるよーに」

なるほどな。

半端な戦力はいらないうてことか。

「でもなんで俺まで…」

「まーまーいいじゃん どーせ部活決まってるんだから」

はあ…

俺もうバドミントンはやらないって決めてるんだけどなあ。

まあ適当にやってさっさと帰るか。

「それで試合の相手を決めたのを顧問が持つてくるはずなんだが…
…遅いな」

「やーすまんすまん。」

入ってきたのは担任の九十九だった。

「遅いです先生、顧問なんですから。」

「ごめんごめん吉村。これが二年生の試合するメンバーだから適当に1年と試合やらせてくれや。」

「先生が顧問なのか…。」

「おー柊！バド部に入るのか？厳しいぞおここは（笑）」

お前が顧問だと全くそんなふうに見えないけどな
という思いはそつと胸にしまっておく創真。

「なら1年生はアップしてそれから試合だ。」

吉村部長の一言で
入部テストが始まった。

強い――

わかつてはいたがやはり上級生は強い。

おそらく満天星学園の中ではレギュラーではないだろうがそれでも明らかに強い。

今まで男子は4人が試合をしたがいずれも敗れ体育館を後にした。中には全国中学生に出場している者もいたが全く歯が立たなかった。

「今年の入部希望者は男子16人、女子13人です。」

吉村が九十九に伝える。

「うーん。今年は掘り出し物があるかなあ。」

「昨年はなかなかのものでしたからね。」

「ああ全国中学生の3位が2人入ったからねえ。」

しかし

と吉村が続ける

「今年は不作かもしれませんね。」

いや、

九十九が入部希望者の名簿に目を通して言う。

「そんなことないかもしれないよ」

創真の番がやってきた。

相手は170センチくらいの二年生、多和田というらしい。

「よろしくお願いします。」

創真はラケットを握った。

懐かしいな、この感覚

4年前に置いてきた感覚

4年間も離れていれば感覚が鈍っていてもおかしくないのだが何故かまったくそんな感覚はない。

『亮……俺、今ならバドミントン楽しめそうな気がするんだ。』

あの事故以来、

バドミントンの楽しなくなっただけでラケットを置いた。

申し訳なくて

自分がいやで

でも、

今なら楽しめる気がする。

亮 - -

もう一度、俺頑張ってみようかな。

お前にはバドミントンが必要だよ

そんな亮の声が聞こえたような気がした。

1度翼をもがれた英雄は
新たな翼を携えて甦る

新たな翼はけして
もがれることはない

再びラケットをとった創真を、
レギュラーでもない人間に止められるはずもなかった。

Ep.3 入部テスト（後書き）

感想なとただけると嬉しいです

Ep.4 入部テスト？

「なんなんだこいつは

これが二年生多和田が創真と対戦したときの印象だ。

こんなやつ中学時代にはいなかった。

『15 - 6』

バドミントンは21ポイント先取のラリーポイント制だ。

相手がミスしてもこちらが決めても1点になる。

いかに自分のミスなく相手のコートにシャトルを厳しく返せるかに勝負はかかってくる。

「1年生なんかには負けられねえ！」

多和田のスマッシュが創真のバック（左側）へ切り込む。

しかり創真はそのシャトルに素早く反応、軟らかいタッチでレシーブしネット前へと返球する。

が

これを多和田は読んでいた。

スマッシュを打った直後ネット前へダッシュしネット前へ返ってきたシャトルをプッシュで決める。

これが多和田の思い描いていたラリー展開。

そして予想通りシャトルは多和田の前へ。

『きた！！』

思いきりプッシュを打つ。

しかし、
ここで創真は決められない。

フォア（右側）へ飛んできたシャトル、つい0、5秒前バックでレ
シーブした創真にとって逆サイドになるわけだが瞬時に反応、飛び
ついて多和田のプッシュをダイビングレシーブする。

これは完全に多和田の予想外だ。

「なっ……！」

多和田の足は止まった状態のままだ、これでは次のシャトルに反応
できるわけではない。

結果、
シャトルは多和田のコートに落ちる。

『イン、ポイント16-6』

「ふう…」

自分でも驚くくらいに体が動く、
勝手にシャトルに反応する。

こんな感じ、久しく忘れてたな…

「…すごい。」

柊くと二年生が試合をしている。
普通なら二年生が圧倒的な強さで新入生をねじ伏せるのだが、どー
見ても柊くんのほうが押している。

「柊くんてあんな強かったんだ…中学時代バドやってなかったって
言ってたのにブランクとかないのかな？」

「これは…!？」

部長の吉村が驚愕の色を隠せない。

一方の顧問九十九は全てわかっていたような表情だ。

「やっぱり終つてあの終だつたんだなあ。」

「彼は何者なんです？」

「あいつは小学校時代に全国優勝しててな、ナショナルジュニアにも選出されてたんだが事故に会って中学時代はバドミントンから離れてたんだ。」

「全国優勝で、ナショナルジュニア!？」

吉村の驚愕の色が濃くなる。

「確かにそれを聞いたらあの實力も納得ですが…」

「彼にblankが感じられないのは中学時代も体力づくりだけしか
かさなかったからだろうな、受験のスポーツテストの結果でもそれ
は見てわかるな。」

そう言つて九十九は吉村へスポーツテストの結果の出力された紙を
渡す。

「なっ…」

50m走 - - 6.5秒
20mシャトルラン - - 14.1回
反復横跳び - - 70回

どれも高校1年生ではトップクラスの成績だ。

これならば4年ぶりにラケットを握ったとしても大した違和感を感じ
ることはないだろう。

「…これは掘り出し物から宝がでてきたかねえ。」

唇の端をつり上げて笑う九十九。

実は彼もかつてはバドミントン選手だったのだが、この話はまたの機会に。

『ゲームセット21 - 8』

「よし」

創真と多和田が握手を交わしコートを後にする。

すぐに創真のもとへ福沢が駆け寄ってくる。

「すごいよ柊くん！4年のブランクとかぜんぜんないじゃん！」
「まあ体力づくりで毎朝走ってはいたから」

…そーいえばこいつ（福沢）の入部テストはどうなったんだ？

「え？受かったよ？」

いつの間に！？

という反応を示したい柊創真だがなんかもうすごいにこやかな笑顔で話しかけてくる福沢星南を見ていたらどーでもよくなってきた。

『まあ受かってたんならいいか。』

こうして入部テストは終了し、

満天星学園バドミントン部に新たに男子7名、女子8名が加わった。

柊創真の物語は、

まだ始まったばかりである。

Ep.4 入部テスト？（後書き）

次はキャラ設定の予定です。

E p ・ e x キャラ設定

キャラ設定

柊 創真

15歳

身長：175cm

1年6組29番

髪の毛は黒で全体的にちょい長め。

部活中は細い白のヘアバンドで前髪が邪魔にならないようにしている。

使用ラケット

NS9900

ガットテンション：29

福沢星南

15歳

身長：160cm

1年6組30番

基本的に明るい性格で男女共に人気がある。

バドの実力は未だ不明だが相当強そう（創真の考え）

使用ラケット

A R C 7

ガットテンション：22

九十九健三

27歳

身長：183cm

1年6組担任

バド部顧問

かつてはバドミントン選手でそうとう強かったらしい。

使用ラケット

M S 1 0 0

ガットテンション：30

吉村健

18歳（誕生日が4月2日）

入学式は4月5日だった

身長：180cm

とりあえず美形。

髪の色は濃い茶色。

満天星学園バドミントンの部長を務める。

部長だが実力は2番手

使用ラケット

A R C - Z

ガットテンション：31

ここからちよつとネタバレ含みます。

市之瀬^{いちのせ} 夕夜^{ゆづや}

15歳

身長：177cm

1年6組3番

髪は創真よりもちよつと短めの黒。

入部テストを突破してバドミントン部に入部した。

中学時代の成績は全国中学生シングルス3位。

新潟から進学して現在は満天星学園の寮から通っている。

ムダにイケメン。

使用ラケット

VLT70

ガットテンション：28

あきは
秋葉 たくと
拓斗

15歳

身長：173cm

1年9組1番

髪は短めでいかにもスポーツ少年のような感じ。

創真や夕夜と同じように入部テストを突破してバドミントン部に入部した。

中学時代の成績は全国中学生ダブルスベスト8。

どうやら星南に興味があるようで…

使用ラケット

NS8000

ガットテンション：26

坂井^{さかい} 絢乃^{あやの}

15歳

身長：163cm

1年6組18番

星南の中学時代からの親友。
髪は腰あたりまでのびている黒。

入部テストを突破してバドミントン部に入部した。

中学時代の成績は全国中学生シングルスベスト8

使用ラケット

ART600

ガットテンション：23

E p ・ e x キャラ設定（後書き）

次から創真たちの話に戻ります。

Ep.5 決意、そして

今日はいろんなことがあった。

現在時刻は夜7時

入部テストを終えて帰宅したらこの時間になっていた。

「しかしまあ……」

満天星学園があんなに大きいとは思っていなかったし、まさか自分がバドミントン部に入ることになるなんて思ってもみなかった。

……いや、思ってもみなかったなんて嘘だな。

俺はきつと心のどこかでバドミントンがしたいとずっと思ってたんだ。

そのきっかけが今までなかっただけ、

本当にバドミントンから離れたいならバドミントン部がない高校に行けばいいだけの話だし…

本当は…

「そうとなれば…」

創真はベッドから起き上がり部屋をでる。
リビングへおけると母さんがテレビを見ていた。

「あら創真どうしたの？」

「母さん、俺…」

そこまで言って、黙ってしまった。
すると母は察したのだろう口を開く。

「いいのよ、自分がやりたいことをしなさい」

「…ああ！」

それだけ言って創真は部屋に戻り、押し入れからあるものを取り出

す。

「ああ、シューズとラケットは新調しないとダメだなこりゃ…」

取り出されたのはラケットバッグだった。

4年前とまったく同じようにクレイにしまわれている。

だがしかしさすがに六年生のころのシューズは小さすぎて履けないしラケットも4年間使っていないとあちこちにガタがきている。

「明日帰りにでもスポーツショップ寄っていくか。」

そう言っていると体が疲れているためか強い睡魔に襲われ、創真は
ほどなくして眠りについた。

・・翌日

いつものように起床して家を出る。

昨日の試合のせいか少し体は筋肉痛きみだ。

満天星学園の校門を抜け自転車置き場に自転車を置いて1年生校舎へと向かう。

昨日も思ったがやはりこの学園は広すぎる。

校門から1年生校舎まで歩いたら20分以上かかりそうだ。

そんなことを考えながら下駄箱で靴を履き替えていると、

「柊くんっ」

福沢星南が声をかけてきた。

「おはよう柊くん！」

「おはよう、福沢さん」

朝からこのハイテンションには創真はついていけない。

「今日から部活参加するの？」

「いや、新しいシューズとか買わないといけないし、明日から行くよ。」

新入生の部活参加は明後日からなのだがスポーツ特待生などは入学式直後から参加していたりするので、今日明日はほとんど自由参加なのだ。

「あ、なら私も買い物手伝うよ。」

「うえっ!？」

思わぬ展開に創真からへんな声がでる。

「いいいいいよ、福沢さんは部活いきなよ。」

「いいのいいの 二人のほうが早く買い物終わるでしょ。」

というわけで放課後の予定が決定してしまった。

満天星学園は一言で言うとスポーツに重きを置いた高校が。

1→12まであるクラスの8クラスはスポーツ推薦や創真のような体力テストでの受験によって入学している。

残りの4くらすのうちの3クラスは文化系部活の推薦で1クラスは勉強で入学した生徒で構成されている。

この学園の校訓は

〃 実力第一〃 であり、

部活や勉強で結果を出すことが求められる。

当然、結果を出した部活にはそれなりの援助金や施設が与えられる。

つまりこの学園では結果を出さない部活や生徒にはものすごく厳しいのだ。

現在この学園には21の体育会系部活と4の文化系部活が存在するが、結果を出しているのは半分ほどだろう。

そんなスポーツに力を入れているクラスに所属している創真たちの授業内容も一般の高校とは少し異なってくる。

まず体育は毎日1時間必ずある。

国語、数学、地歴、生物の中から2科目を選択し週3時間、スポーツ科学を週4時間、体育とは別に存在する能力測定が週に3時間、というような構成だ。

さらに毎日4時間授業で午後からは部活にあてられている。

そんな運動好きにはたまらないクラスで柊創真は睡魔と戦っていた。

今は2時間目の選択国語の時間だ。

選択だがほとんどの生徒が国語はとっているためあまりクラスに変化はない。

昨日の疲れがまだとれていなかったのかひどく眠い。

『あーやばい、そろそろ寝ちまいそうだ。』

と創真が精神的ギブアップをしようとしていたとき、

ドスッ

と創真の首辺りにシャーペンが突き刺された。

「~~~~~!!?」

声にならない悲鳴をあげる。

涙目になりながら後ろを振り向けばシャーペンを持ってニッコリし

ている福沢星南の姿。

「眠そうだったから、起こしてあげた」

「限度つてもんがあるだろうがあああああああああ」

と小声で叫ぶ柊創真。

おかげで眠気はふつとんだが、首辺りに黒い点が残ってしまった。

なんとか2時間目を終えた創真たちは体操服に着替えてグラウンドへ向かう。

次の授業は能力測定だ。

基本的に男女別なので福沢はいない。
女子はどうやら体育館のようだ。

「よし集まったな、今日は走り幅跳びの能力測定するぞ。」

見るからに屈強そうな体育教師が喋る。

今創真たちがいるのは陸上部用のグラウンドだ。

周りにはトラックが整備され中央には芝、端には走り幅跳び用の砂場などが用意されている。

「まあ今日は最初の測定だからリラックスしてやればいいからな。」

次々と測定で跳んでいく男子生徒。

順番待ちをしている創真に1人話しかけてきた。

「昨日バドミントン部の入部テスト受かった人でしょ?」

話しかけてきたのは創真より少し背の高い少年。

「ああ、そうだけど。」

「俺も昨日受かったんだ。市之瀬夕夜、よろしく」

「ああ、よろしく」

そう言つと市之瀬の順番がきていたようで走って行って跳んだ。

明らかに他のやつより跳んでいる、1m以上差があるかもしれない。

創真が真剣に跳んでもあの位置までは無理だろう。

『こんなやつがバド部にはいるのか…』
自然と口元が緩んでいた

『…楽しみになってきた』

能力測定も終わり、
4時間目の授業も終わって皆部活の準備をしている。

創真も荷物をまとめ教室を後にする。

さっき聞いたところ市之瀬は今日から部活に参加するようでラケットバッグを肩にかけていた。

「柊くん」

不意に後ろから声をかけられた。

福沢だ。

「一緒にシヨップ行ってくつて言ったのに何で一人で教室でちゃうかなあ？」

若干声が低い。
どうやら機嫌が悪いらしい。

「あー…ごめん、忘れてた…」

苦し紛れの弁解をする創真。

実はこのまま1人でいくつもりだったわけで、

「私も行くから」

向こうにしてみればただの手伝いのような感覚なのだろうが、いかんせん創真にはあまり女子に対する免疫がない。

つまり緊張、

疑似デートのような状況に1人空回りしている創真と、
まったくそんなことを気にしていない福沢星南の放課後デート(?)
が幕をあける。

Ep.5 決意、そして（後書き）

感想お待ちしています

Ep.6 放課後デートと

こうなるなんてまったく思っていなかった。

現在唇すぎ -

創真の買い物に福沢が付き合うことになったわけだが、時間が時間なので昼食をとってから買い物にいくということで意見がまとまった。

もちろん1階の食堂で済ませばいちばん手っ取り早いのはあるが

『これから毎日食堂使うことになるんだから今のうちに外で食べておこーよ』

という福沢の提案で近くの街まで行くことになったのだ。

創真は自転車を傍らに置いて校門近くで福沢を待っている。

「はあ…、まさか女子と二人で飯たべたりすることになるとわ…」

創真の顔は緊張でひきつっている。

ちなみに創真は福沢だから緊張しているわけではなく、女子と二人で出掛けるといふ疑似デート的な展開に緊張しているのである。

やっぱりここは男がリードしないとイケないのかなあ…

と創真の思考が変な方向へ向かいかけていると、

「いめん柊くん」

福沢が走ってきた。

彼女はバスで通学しているため自転車は使っていないらしい。

（満天星学園にはJRの駅から学園前まで直通のバスが走っている）

「まずお昼ご飯食べにいこうよ。」

「それはいいんだけどさ」

創真は自分の自転車を見る。

その自転車の荷台に人間が1人座っている。

言うまでもなく福沢星南だ

「あのー…なんでそこに座ってんの？」

「だってここから歩いたら遠いし。」

福沢は下りるつもりはさらさらないらしい。

サドルの部分をバンバンたたいて早く乗れよと急かしてくる。

しかたないか…

観念した創真は自転車に乗り、後ろに福沢を乗せたまま街まで自転車を走らせた。

喫茶店のようなところだった。

福沢の希望で入った店はモダンな雰囲気与生活に余裕のある男性や主婦などが訪れていそいだ。

値段は割とお手頃なので一応福沢の分も払っておいた、

創真はサンドイッチ、福沢はパスタを食べながら会話する。

「今日は何を買うつもりなの？」

「とりあえずラケットとシューズかな、それがないと部活できないし」

「あ、そっか。小学校のころのままなんだよね。」

創真は4年間バドミントンから離れていた。

故にその間に発売された製品についてはまったくの無知。

極端な話素人と同レベルだ。

なので、

「福沢さん、ラケットとか選ぶの手伝ってもらえないか？」

「もちろんいいよ、私でよければ。てゆーか福沢さんとか他人行儀な呼び方やめてよ。」

頬を膨らませ福沢がむくれる。

「なら何て呼べば…?」

創真は女子に免疫がない。

それはもう名字にさん付けでしか女子を呼んだことがないくらいに。

「普通に星南って呼んでよ、私も柊くんのこと創真って呼ぶから」

「……わかった……」

本当はすごく恥ずかしいのだが、あえてクールに振る舞おうとしてしまつのは男のプライドなのだろうか。

やってきたの県内で最も大きなスポーツショップ。

あらゆる種類のスポーツ用品を取り揃えている。

「えーと…バドミントンのブースは…」

福沢は1人ですたすたと行ってしまうので創真は慌ててその後についていく。

「まずはシューズからかな、創真足のサイズは？」

「27、5」

本当は好きなメーカーなども伝えたいのだが、創真と名前で呼ばれたことが強烈すぎて上手く話すことができない。

「これなんかどう？」

福沢星南が取り出してきたのは有名メーカーのニューモデルだった。

偶然にもそのメーカーは創真が小学生時代に愛用していたメーカーで、試履きしてみたところぴったりフィットした。

「これいいな、シューズはこれにするよ福沢さん。」

福沢のほうを向いて話しかける。

が、

なんだか福沢は不機嫌だ。

「……福沢さん？」

創真の体を冷や汗がかけめぐる。

「…名前であっていった」

「あ…、」めん

「呼んで、名前」

「……………星南」

「なに？」

急に星南は機嫌がよくなった。

そして何事もなかったかのようにラケット売り場へ向かう。

『女ってよくわかんないなあ……』

冷や汗をかきまくった創真も星南についていく。

「ラケットっていろいろ種類あるし性質も違うから自分に合ったラケット探すの大変だよねえ。」

「ああ、俺はどっちかっていうとコントロールプレイヤーだからシヤフトは柔らかいほうがいいな。」

なんだかんだでちゃんと俺の買い物をちゃんと手伝ってくれている。

- - 結構いい娘だよな

屈んで下の方のラケットを見ている星南のほっを見ながら思う。

その視線に気付いたように星南が

「?どうしたの?」

「なんでもない、はやくラケット決めようぜ。」

「あ!ねえこれちょっと見て!」

星南のテンションが急激にあがる。

何事かと思って創真が星南が見ている物に目を向ける。

そこにはビーズでつくられた小さなシャトル型の携帯ストラップが売られていた。

星南はきゃーとか言いながら目を輝せている。

「…欲しいのか？」

物欲しそうな星南の目を直視できなくなって聞いてみる。

「あつ！そうだ創真！これ一緒に買って携帯につけよう！ね！？」

いやいやそれは付き合っている者同士でするんじゃないだろうか？

と考えるが、星南はすでにストラップを2つ持ってレジへ行ってしまうっている。

「ちよつ、待ってって！俺のラケット選びは〜！？」

「お会計32、500円になります」

結局ラケットは

星南と検討した結果シャフトが柔らかく弾きがいいNS9900を購入。

ストラップも漏れなく俺が2つ購入したわけだ。

「ありがとくな買い物つきあってもらって……星南」

やはり名前を呼ぶのはものすごく抵抗がある。

「気にしないで、私もいろいろ見れて良かったよ。」

ストラップも買ってもらったしね

そう言う星南はものすごい上機嫌だ。

ちなみに帰宅中である現在もやはり荷台に星南が乗っかっている。

星南を駅まで送りとどけ、創真も自宅へと帰った。

今日創真の新しい武器、
ラケットとシューズが手に入った。

「ふふっ」

はやく部活で使いたい。

そんな気持が募っていった。

「…あ、そうだ」

創真は携帯を取り出してメールを作成する

その携帯には今日一緒に買ったストラップがついている。

・今日は買い物つきあってくれてありがとう

星南へと送るメールだ。

駅まで送り届けたところで（ほとんどむりり）アドレスを交換していたのだ。

メールを送信して創真は携帯を机に置き、ベッドに横になる。

）

携帯の着信音が響く

創真は手にとって受信したメールを開く

- 楽しかったよ

創真は携帯をとして部屋の明かりを消した。

ほんの少し自分の口元がゆるんでいることに気づかないまま。

Ep・6 放課後デートと（後書き）

駄文ですいません…

Ep.7 本格始動

ついに今日から新入生も全員参加となって部活が始まる。

そのため校門をくぐる生徒たちは部活で使うのであろう様々な道具を持って校舎に入っていく。

新入生、柊創真もそのなかの1人だ。

先日買ったシューズとラケットを以前から使用していたラケットバッグに収納し、学生鞆にラケットバッグの2つを持って登校してきた。

1年生校舎に入ったところで声をかけられた。

「よっ、柊」

同じくらすの市之瀬夕夜だ。

彼は一昨日から部活に参加しているためラケットバッグなどはすでに部室に置いてあるらしく、手には薄い学生鞆だけだ。

「そーいえば柊、前福沢と2ヶツしてどっか行ってただろ。」

「ぶふーっ!!」

思わず吹き出す創真。

「お、その反応はもしかして…?」

市之瀬がニヤニヤしながら問いかけてくる。

「ちがう!断じてちがうぞ!」

全力で否定する創真。本当になんでもないので別にそんなに焦る必要もないのだが、なんとなくか携帯には福沢星南と同じ携帯ストラップがついている。

いらぬ誤解を生みたくはないのだ。

「なんだよつまんねーな!」

4階にさしかかる階段を上りながら会話は続く。

「そういう市之瀬はどうなんだよ。」

今度はこちらが反撃とばかりに創真が質問する。

「あゝダメだ。確かにうちのクラスかわいい娘多いけど俺は1人には決めらんねーな。」

…つまりこいつはタラシなのか？

そんなことを考えながら教室のドアを開けて教室に入る。

「あ、創真おはよう。」

一斉にクラスにいた男子の視線が創真のもとへとそそがれる。
それはもう痛いくらいに。

後で市之瀬に聞いた話だが、どうやら星南はかなりの人気があるらしい。

「おはよう、…星南…」

やはり抵抗は感じるが、以前よりはましになっただろう。
隣で市之瀬がニヤニヤしているのは気にしないことにする。

授業も終わり昼食も食堂で市之瀬と済ませ、二人は体育館へと向かう。

そのバドミントン部専用の体育館に入るとすでに2、3年生が準備を始めていて、他の新入部員は端に荷物を置いて準備を手伝っている。

満天星学園のバドミントン部は男女合同だ。もちろんメニューの話で基本的には男子は男子と、女子は女子と練習して試合をするが、たまに混合ダブルスや男子が女子と試合をすることもある。

男子の荷物は体育館の入口から見て右側、女子が左側だ。

創真と市之瀬は荷物を置き、既に準備していた部長の吉村のところへ向かう。

「お、来たか期待のルーキー。」

「「よろしくお願いします!」「」

「始まるのはまだ先だからストレッチでもしててくれ。」

バドミントン部の練習開始時間は午後1時からと決まっていて、それまでは各自ストレッチと軽いアップをするのが通常らしい。

女子のほうを見ると福沢星南もストレッチを開始していた。

目が合った。

手を振っている。

なんだかものすごく恥ずかしくなって創真は壁のほうを向いてしまった。

『こいつ…実はものすごいシャイなのか…？』

とそんな創真の隣で思う市之瀬夕夜。

彼には二人がどう見てもいい雰囲気にはしか見えない。

「集合ー！！」

吉村の呼びかけで男女一斉に顧問九十九のもとへ集まる。

「ん、今日から1年が参加だな。まあ前からきてる奴もいるがこれからよろしく頼む。」

じゃあ男女わかれて部長指示したら練習開始な、

と九十九が言うので男女分かれて集まる。

基本的に20面あるうちの右側10面を男子、左側を女子が使う。

ちなみにコート配置は入口から見て縦に5面横に4面の20面だ。

「よし、今日から新入部員が入って人数も増えたがやることはこれまでと変わらない。すぐにインターハイ予選が始まるからな。」

吉村が話す。

インターハイ予選、それは全国高等学校総合体育大会、通称インターハイ出場をかけて争う試合だ。

インターハイに出場できるのは団体1校、個人戦のシングルス、ダブルスは2位までとなっている。

（ただし、開催地は団体2位、個人戦4位までが出場できる。）

「俺たち満天星学園は今のところ7年連続で神奈川県大会で優勝、インターハイに出場している。その記録をここで止めるわけにはいかない。」

わかるな？

吉村が1年生に向かっていう

「たとえ1年だろうがここは実力第一の学園！強いものを団体のメンバー7人にいれる。そして出る以上は負けることは許さない！！」

男子全員の意思が疎通する。

「狙うのはインターハイ優勝だ！！いくぞお！！」

おおお！！

「男子うるさいわねえ……」

そう言うのはバドミントン女子の部長、

朝丘 あさおか 麻季 まき だ

「私たちは昨年インターハイベスト16、今年はそれ以上を目指します。」

強い意志のこもった声で話す。

「そのためには使える人材は1年生だろうと使うわ。だから1年生も上級生を押し退けてレギュラー入りするつもりで全力でやりなさい！」

はい！！

「『』というわけで」

男子と女子二人の部長の声が重なる

「『今からレギュラー決めのランキング戦をやる』」

Ep. 7 本格始動（後書き）

話つくるの難しいですね…；

Ep・8 校内戦と新勢力（前書き）

ようやくバドミントンらしい話です。

Ep.8 校内戦と新勢力

校内戦が始まった。

団体戦のレギュラーになれるのは7人。

現在の満天星学園バドミントン部の男子は3年生が12人、2年生が8人、そして新入の1年生が7人の計27人。

この中でレギュラーに食い込むのはなかなか難しいだろう。

さらに昨年のインターハイ、全国選抜を経験している2、3年生もいるため、ほとんどメンバーは決まっていると言っても過言ではない。

「よし、まずは1年生と2年生で試合だ、結果は俺のところまで言いくるること。コートの空いたところから3年生もいれていくからな。」

部長の吉村が指示を出す。

創真と市之瀬はすぐに試合をするところになった。

「頑張ろうぜ柊。」

「ああ、勝とうぜ。」

創真と市之瀬は拳をぶつけてそれぞれのコートに入っていく。

創真の最初の相手は2年生の柏村^{かしむら}大^{だい}。

春休みに行われた全国選抜の団体戦レギュラーを張っていた選手だ。

「「よろしくお願いします。」」

『こいつが吉村部長が言っていた期待のルーキーの1人か…』

柏村がワンミスをしながら思考する。

『入部テストの日は部活休んだから実力の程はよく分からねえが…、レギュラーがかかってんだ。負けるわけにはいかねえな。』

「ラブオール、プレイ!!」

一方こちらは市之瀬のコート。

すでに試合は始まっている。

『イン！ポイント4 - 1』

市之瀬の対戦相手は2年生の木田^{きた} 鉄平^{てつぺい}

柏村と同じく全国選抜の団体戦レギュラーだった選手だ。

『くそっ、こいつ強いな…』

木田がシャトルを市之瀬に返しながら思う。

『よし、勝てるな。』

市之瀬はショートサーブを放つ。

ネットの上ギリギリを通過して木田のコートへ向かう。

木田はそれをスピネットでフォア前に返す。

『ちっ、うまいな。』

市之瀬はこれを大きくロブ、木田にチャンス球が上がる。

「おらあ!!」

咆哮とともに木田がジャンピングスマッシュ、市之瀬の左サイドを打ち抜く。

バアン!

市之瀬は反応するがラケットの出が間に合わない。

『サービスオーバー、2 - 4。』

「…おもしれえ。」

市之瀬が笑う。

「そうでなくちゃこの学園に来た意味がねえよなあ!!」

『11 - 6、インターバル』

「ふう。」

第1ゲームのインターバルは創真がとった。

『やっぱり選抜のレギュラーだけあって上手いな…。』

この1ゲーム目のインターバルまでのプレーを見ていると柏村も創

真と同じようなコントロールプレイヤーだ。

ならば対策も立てやすい。

自分の打たれたら嫌なコースに打てばいいのだから。

だがそれは向こうも同じ。

従って嫌なところでのラリーの応酬になる。
つまりは…

「我慢し続けないといけないわけか…。」

『11 - 6、プレイ!』

創真はロングサーブを柏村へ放つ。

柏村はそれをジャンピングスマッシュと見せかけてクロスヘカット、
意表を突かれた創真は反応が一步遅れる。

「くそっ!」

クロスにロブを上げるが少し浅い。
それを柏村は見逃さない。

パン！

浅い球を逃さずスマッシュして創真の右側を打ち抜く。

『サービスオーバー、7 - 11。』

『1年なんかに負けられない。』

柏村はユニフォームの袖で汗を拭い、呼吸を整える。

『まだ序盤の4点差だ、焦る必要はない。まず一本とることを考える。』

そして柏村はショートサーブを放つ。

「なっ…！」

驚いたのは柏村。

柏村が放ったショートサーブにドンピシャのタイミングで創真がネット前でプッシュ。

鋭い線を描いてコートに突き刺さる。

『読んでいたのか？ショートサーブを…？』

再び流れは創真に傾いた。

『ゲーム！21-18 ファーストゲームオーバー、チェンジエズ。』

ファーストゲームは市之瀬が取った。
終盤まで拮抗した展開から最後に抜け出したのだ。

「なんとかいけそうだな。」

市之瀬が創真のほうのコートを見ると、向こうもファーストゲームを終えてチェンジコートするところだった。

『柊も1ゲームとったみたいだな。』

俺も負けてらんねえぜ！

『セカンドゲーム、ラブオールプレイ!!』

体育館のステージ上に机と椅子を出して試合を眺める顧問の九十九。

「…これは新勢力が現れたかなあ…？」

『レギュラーメンバーの大幅な入れ替えもあるかもしれんな…』

その表情にいつもの気だるそうな雰囲気はなく、真剣そのものだ。

「あ、そっいえばあいついつ帰ってくるんだっかなあ…？」

『ゲームセット！ウォンバイ市之瀬、21-18、21-13！』

「ありがとうございました。」

市之瀬は先輩木田を倒してまず1勝を手に入れた。

「柊はどうなったのかなー？」

創真が試合していたコートを見たが既に創真の姿はなく、部長の吉村に結果を報告しにいているところだった。

「柊創真、21-14と21-11で勝ちました。」

「よしお疲れ、次の試合が入るのはまだ先だからそれまで自由に休んでくれ。」

「柊、勝ったんだな。」

市之瀬が創真の肩に手を回してくる。

「ああ、そういう市之瀬も勝ったんだな。」

「あつたりまえだろ。このままレギュラー入りするつもりなんだからさ。」

「俺もやるからにはそのつもりさ。」

創真と市之瀬は再び拳を交わした。

同時刻

満天星学園校門前。

「あー疲れたなあ、こんなん練習とか鬼だろくそー吉村のやつー。」

ラケットバッグを背負った少年は愚痴を溢していた。

「あん？もう練習始まつてるのか、ああそついえばそろそろ校内戦の時期だもんなあ。」

そう言いながら少年は体育館へ歩き出す。

「まったく1ヶ月も海外行ったらこっちの感覚おかしくなっちゃまうぜ。」

そう言う少年のジャージの胸には日の丸がついていた。

E p . 8 校内戦と新勢力（後書き）

まともりなくてすみません…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8718p/>

創真と羽球

2011年1月9日01時28分発行